

Ann. Rep. Asahikawa  
Med. Coll.  
1985. Vol. 6, 49~62

## 19世紀ドイツの偉人変人

### —その3 海外探険の学者たち—

丸子基夫

#### I 1814年の春の陣

1. スイス戦線からパリに戻って一息ついていた陸軍主計官アンリ・ベールは1814年3月30日、独露の連合軍が最後の防塞モンマルトルの丘を占領するのを目撃した。同日、攝政マリ・ルイーズ皇后はパリから退去し、アレクサンドルⅠ世はナポレオンに従うことを拒否した前外務大臣のタレーラン侯とすでに接触していた。連合国は「暴君」といっさい交渉せず、仮政府の首相となった侯は元老院をたくみに誘導して、4月4日投票によって皇帝の退位を議決させたうえ、刑死した前王の弟を王座に迎えて正統主義の実を諸国に示すことに成功した。媾和条約はフランスに1792年の国境に戻ることを要求したのみで、ナポレオンは皇帝の称号を保持し、十分な年金を約束されたうえ、エルバ島の王となってそこへ移りすむ（5月3日）。「皇帝とともに没落した」ベールは陸軍から休職手当をうまくかすめ取るや、最愛の国イタリアでの領事職と昔の恋人を狙ってミラノへおもむき、レオナルドの「晩さん」を凝視しつつ、ヨーロッパ中その原稿をもち歩いた「イタリア絵画史」の完成にうち込もうとする。

プロシヤ軍がモンマルトルの丘を奪取するのを見たとき、参謀長グナイゼナウの脳裡にはプロイセンに絶望して退職して以来のさまざまな体験がかけ巡ったことだろう。イエーナでの完敗の後「ジャコバン主義者」と煙たがれながら先輩らとやりとげた軍制改革。磐石不敗のナポレオン体制を崩すべくバルト海域とロンドンに密行して対仏大同盟の結成に奔走した3年間。ライプチヒの勝利後に同盟国首脳たちに取りついた和平気分に対する憤慨と落胆（さいわいロシア皇帝の強硬な姿勢がメッターニヒの日和見を押えてくれたが）。その自決のすこし前に訪ねてきてドイツ諸領邦の救いようのない割據主義に悲憤の涙を流した天才作家ハインリヒ・フォン・クライストの蒼白な童顔 etc.etc.。だがグナイゼナウが将来のドイツ統一実現の希望を最も托しうる政治的人物、以前からの改革協同者たるフォン・シュタイン元プロイセン首相は今何をしているのだろうか。

2. 1812年5月ブテルブルグに乞われて側近の政治顧問となり、皇帝に大きな影響力を

もったと言われるシュタインは、<sup>(1)</sup> ナポレオンを、始めはドイツの救いがたい専制小国家団魂を一掃してくれる解放者と期待したが、持ち前の宗教心から見ても単なる征服欲の鬼、世界破壊者でしかないときめつけ、この「偉大なる犯罪者」を打倒すべく彼が練りあげ、一貫して主張し、幸運に恵まれて実現せしめた政治的事績は次の三つと見なされる：

i) 壊滅した敵が1812年11月にロシア国境から退却し、ナポレオンが自国での陰謀を聞いてパリへとんで帰ったことが知れたので、クーツゾフ総司令官が自軍の極度の疲弊を訴え、他の宮廷人ともども「この戦争はロシアの民族防衛戦争であって、プロイセンやオースタリーのためのヨーロッパ戦争ではない」と尤もな理由をあげて皇帝に終戦をすすめた時、シュタインの強い人格と、透徹した未来展望に基づく積極的な助言がハムレット的なアレクサンドルを徹底的追撃に決意せしめた。

ii) 1812年12月末、フランス軍が敗走し始めた時、国王の許可なく旗下のプロイセン軍をナポレオンの指揮から離脱せしめたヨルク将軍は、もともとシュタインらの改革に反対した自我の強い王党派貴族なのだが、彼はこの肌の合わない、しかし外国従軍の経験をもつ将軍を説得して東プロイセン州議会を召集させて対フランス宣戦を議決せしめた。これで彼の持論たる「<sup>ナチオン</sup>国民と<sup>シュタート</sup>国家の一致」の実をあげてからロシア大本營に戻り、決定的なロシア・プロイセン友好同盟条約を苦難の末成立させた。これがナポレオンの底力を恐れてなお及び腰だった国王を宣戦布告に踏み切らせたのである（1813年3月）。

iii) 追いこみに入った同盟軍がライン河をこえて西進する間、シュタインは同盟国軍大本營とともに移動しながら“Zentral-Verwaltungs-Rat deutscher Länder”<sup>(2)</sup>の長として、フランス軍が退却した後のドイツ諸国の混乱した行政を立直し、全ドイツの人的物的エネルギーを総動員するという大役を引受けた。

同盟大本營においては既に各大国首脳のあいだで、特にドイツの戦後処理をめぐる様々の思惑が交錯していたが（まるで第二次大戦末期のダンバートン・オークス会議のようだ！—丸子注）、この暗闘のなかでシュタインは、長年の理想たる「（フランスとロシアの間で）民族性と自主独立を主張できる統一連邦ドイツ（但し新教国プロイセンを中核とする）」を実現すべく努力してゆくのである。

3. 1814年の秋、諸国の首脳や代表がウィーンに向って、胸に共通のある不安をいだきながら集まりつつあった時、ニュルンベルクの書店から出た小冊子がたちまち評判になった。「ウンディーネ」の作者として有名なフーケの編集になる「<sup>(3)</sup>ペーター・シュレミール奇談」という小説で、題名の主人公が Chamisso なる文人の友にあてた11の手紙の形をとっている。筋のあらまはこうだ：

貧しい青年シュレミールはさる大富豪の園遊会で灰色服のふしぎな男——客達の望みに応じてポケットから何でも、三頭立ての馬車まで出してみせる悪魔なのだが——に丁重に

話しかけられて、ひとつの交換取引に誘いこまれる。欲しいだけの金貨が出てくる魔法の財布と引換えに、彼は己れの影をその男に渡してしまうのだ。影を失った青年は今や、いくら金があっても人間とは認められず、子供らにまでのしられて日陰者以下に扱われ、夜も月夜には歩けない非人だ。性悪な下男の脅迫、度重なる失恋、再三の逃亡。唯一人の忠僕と共に金にあかして馬車で村から町へと旅を続け、刹那的な快樂や大尽気取りに憂をはらすしかない。絶望と悔恨の一年がやっとすぎてあの灰色服の男がシュレミールの前に現われ、青年の懇願に応じて財布と交換に影を返そうと言う。但しその代り、こんどはシュレミールの魂を譲り渡すという契約書を血で書け、と悪魔の本性をあらわす。青年は決心して財布を谷底に投げこんで悪魔を追いはらい、一生影無しの汚名に耐えようと覚悟する。今や元の貧乏青年にもどったシュレミールは真暗な森で木こりの仕事をし、昼は雨の日だけ外を歩き、地底の鉱山で働き、とにかく悪路を大急ぎで歩くしか生きる術がない。たちまち靴をはきつぶして裸足になるときもあり、やむなくバザーで丈夫そうな古靴を買求める。「私は晩までに着こうと思っている鉱山のことを考えこんでいて足がどこを踏んでいるのか見ていなかった。二百歩も行かぬうちに私は千古斧の入らないような縦の密林に入ったのに気がついた。更に数歩前へ進むと、苔とユキノシタ類しか生えていない荒涼たる岩場で、その間に氷と雪の原が広がっているところに出た。……そうなのだ。私が7マイル靴を手に入れたことは今や疑いなかった。」この不思議の靴をはいてシュレミールは世界の端から端まで縦横にかけめぐって自然研究に没頭する。お蔭で人間社会を相手にしないですむ至福の境地にあり、この比類なき苦い経験と観察をば全人類のために役立てようと、ここに一書を世におくる気になった。「親愛なるシャミソー君よ、私がこの地上から姿を消しても私の不思議な話が少なからざる地球人の教訓となりうるようにと、君をこの奇談の記録者に選んだわけです。だが君がもし人間のあいだで生きてゆこうとするのなら、まず何よりも影を尊ぶべきであり、金など二次だと知るべきなのだ。」と結んでいる。

この寓話はたちまち各国語に翻訳され、特に英国では民衆本として広くもてはやされたし、仏訳は3種類も出た（ひとつはフランス生れであるシャミソー自身の訳）。ところでここでの主題である影の喪失とは何を意味するのか。評者はこの作品が書かれた時期におけるシャミソーの境遇を慮って、それは作者のつらい祖国喪失感の隠喩だと解した。フランス亡命貴族の息子でプロイセン軍に就職し、後に祖国復帰が許されて高校教授になるべくすすめられたが、断って自らの意志でもどった定住国ドイツでも、折からの国をあげての対仏解放戦争に参加を志したが叶わず、コスモポリタンの文学仲間の宅に宿をかりて悶々としていた時に、「時代が私にどうしても剣をとらせないというなら、ペンをとりて自分の存在の証しをするしかない」と呻きつつ作ったフィクションだからである。またシャミソーは後のフランス語版の序文で影についての物理学的解説を援用し、「物体の光

に照らされない部分の側にできる暗い空間が影と呼ばれる立体 (le solide), 物体と光源との相互関係によってさまざまに変化し、時には消えたり薄くなるかと思えば時には極少にも巨大にもなるという不思議な実体」だとする。しかもそれは一方ではまた「堅固なもの = le solide」でもあり、人間を照らす光がないとき人間はこの堅固なものを失うのだ。1814年の対仏戦争完勝の国民的祝賀をシャミソーはドイツ人と共にできないし、「シュレミール」の대当りにもこの複雑な魂の傷は癒されはしない。救いの最大なるものは3年前からベルリン大医学生として始めた博物学のフィールドワークだった。1810年パリで交際したA. フォン・フォンボルトにならって海外探険の機会を狙う彼は、大学と自家温室における動植物学研究に励み、「ベルリン周辺の植物誌」を共著で完成し、さらには時代の新科学である電磁気学にも関心を示して、シャミソーは文芸人から経験科学者へとはっきり変貌してゆくのである。

## II アレクサンダー・フォン・フォンボルト

1. いまひとり、この時期にパリに留って大仕事に没頭していたドイツ人に、著名な地理学者アレクサンダー・フォン・フォンボルト (1769-1859) がある。彼は1799年6月から植物学者で画家のエメ・ボンブラン (1773-1858) と共にアマゾン河北部の密林から出発してアンデス山中にインカ族の部落をたずね、チンボラソ山を高山病に悩まされながら5,759mまで登り、所謂フォンボルト海流を「発見」して温度を測り、ついでスペイン領メキシコ (当時のヌエバ・ヒスパニア) に入って約1年間この国を博物学・気象学的に研究するのみならず、合衆国およびロシアとの関係において政治経済的に調査して多くの鋭い洞察をものにし、合衆国をへて、1804年8月ボルドーへ戻った時は、その間に彼の消息がいくどか途絶えたこともあって、二人を迎えたパリの学界の興奮は一時ナポレオンの功名心を苛立たすほどだったという。(折しもこの五月には元老院が全会一致でナポレオンを皇帝と宣し、また国民投票によってフランスは世襲帝国と確認されたのである。) 以後フォンボルトは20年パリに留って独仏人助手と共に彼の探険旅行の成果をフランス語で書き下すことに専念し、1827年迄かかって35巻の名著を刊行するのだが、ちょうどナポレオンが退位した1814年の春は彼が「メキシコ王国の政治状況についての試論」をドイツ語で推敲している最終段階であった。皇帝と同じ歳で、実験科学を大いに尊重したナポレオンに対して彼は一定の親近感をいだいており、1798年、將軍の対イギリス遠征軍についてエジプト研究旅行を志したこともあったが、本質的に政治家でない彼は、このたびの前人未踏の学術探険行においては十分ナポレオンに匹敵する仕事を為しとげたという自負もあり、何よりも平和こそが科学者交流の第一条件だから、昔の全ヨーロッパ的視野の政治家から全くの征服戦略家に変質してしまった皇帝は一日も早く退いてもらいたい、というのがフン

ポルトラ学者たちの本音であろう。<sup>(5)</sup>それはともかく、ここに彼のメキシコ論のうち最も興味ふかいと思われる、ロシヤ人の進出ともからむニュー・カリフォルニア（当時はスペイン領とされていた、現在の合衆国西海岸とカナダのブリチシュ・コロンビア州。丸子注）についての試論の一部分を訳出してみよう。

## 2. ニュー・カリフォルニア地方の統計的分析

〔ニュー・スペインの政治的状況、第8章から〕

1803年度の人口……………15,600

面積（平方マイル）…………… 2,125

1平方マイル当りの人口密度… 7

サン・ディエゴの港あたりから Mendocino 岬へ広がっている太平洋岸はスペインの地図で Nueva California と名づけられる。そこはスペイン政府が1770年頃から伝道会と軍哨所を置いている細く長い地帯だ。Mendocino 岬から南へ78マイルのサン・フランシスコ港を北限として、その北には村落も農場もない。現状においてニュー・カリフォルニア地方は単に197マイルの長さで10マイルの幅があるだけ。ここからメキシコシティまでの距離は直線にして Monterey（シスコから少し南にあるニュー・カリフォルニア伝道会の本部所在地）から合衆国首都ワシントンまでに等しい。一方イギリスの地図では、フランシス・ドレイクが1578年に始めてアメリカ北西海岸で北緯38°と48°の間に達したという、あまり確かでない説に基づいてこの地を New-Albion<sup>(6)</sup>と呼び、それに賛成する地理学者もいる。だが彼らは忘れている。ポルトガルの航海者 Cabrillo がメキシコ副王の命を奉じて1542年に北緯43°までを終着目標としてこの海岸を探ったことを。だから正確に言えば New-Albion という地名は43°～48°の部分にのみ限られるべきだろう。ところでスペイン領サン・フランシスコ村の伝道会から、北緯61°のプリンス・ウイリアム湾や Hodiak（Kadiak）島にあるギリシヤ正教の伝導会までは1000マイルを越す海岸地方が存在し、ここにはもともと自由な人びとが住みつき、ラッコの大群が棲息しているのだ。であるからドレイクの New-Albion の範囲についての論争や、ヨーロッパ諸国民が十字架を立てたり、木の幹に刻字したり、酒瓶を埋めたりして獲得したと思っている、いわゆる領土権についての論争などは、実に無駄なものと思なしてよろしい。

オールド・カリフォルニア（カリフォルニア湾をかこむ東西の陸地。丸子注）の土地がひどく乾燥して石だらけなのに、こちらはとても良く水が引かれて肥沃だし気候は東海岸の同じ緯度よりずっと温暖である。今この地にある18の伝道所では36人のフランチェスコ派の僧の下で小麦、唐もろこし、各種豆類が欧州からとり寄せられ、手際よく豊富に栽培されている。カナダ、ルイジアナと同じくこの地原産の、とても酸っぱい実のなるブドウは1769年の最初のスペイン開拓民も見つけていたが、伝道僧は古代ギリシヤ、ローマ人によって全欧に拡められたブドウの種を導入し、今やモンテレーの南北でひろく良いワイン

がとれている。

メキシコ大司教区文庫の公文書から明らかにされた統計は次の如くである：

村の数	定住農民人口 (殆ど土着民)
1776年…………… 8	1790年…………… 7,748
1790 ……………11	1801 ……………13,668
1802 ……………18	1802 ……………15,562

30年前まではほとんどが漁撈と狩猟の民だった土着民における産業の発達はめざましく、今ではピラミッド型の大きな家を建て、イグサを器用に編んで内から極薄にアスファルトを塗って防水した小桶に水や濁酒を入れて愛想よくスペイン人に配っている。ポンプラン氏はこれらを幾つも自分のコレクションに収めた程だ。

カリフォルニアの人口は、もし数世紀前からスペインの各領地を支配している法律がなければ、もっとずっと増加したことだろう。というのは、これらの法によるとモンレー区に駐留するスペイン軍人は兵営の外に住んで入植民として定住することが許されないのである。伝道会の僧たちはそもそも、白人階級がものを考える人間 (gente de razon 理性の人々、スペイン語)であるため、インディアンのように盲目的に服従するのを潔しとしないので、彼らの入植に反対してこの『不健全な掟を作らせたのだ。退役した兵士たちが妻子をもうけてあちこちの借農地に入植できれば彼らの老後も安定し、短期間でニュー・カリフォルニアはすばらしい植民地として栄え、ひいてはペルー、メキシコ王国、フィリピン諸島と交易するスペインの航海者にとって、この上なく有利な避難地および休養地となるだろう』とは啓蒙された一スペイン航海士官の日記(1802年刊)に見える批判である。<sup>(7)</sup>これは17世紀に英国が領有したばかりのニュー・オランダ(現アメリカ東北海岸)において施行した植民法とくらべれば、全くもって度しがたいドン・キホーテの根性としか言いようがない。<sup>(8)</sup>

さて我々はサンフランシスコ港と Mendocino 岬から、ロシア人がプリンス・ウィリアム湾(北緯61°)に作っている居留地までずっとのびている北西沿岸に対して、なお一べつしておかねばなるまい。

地理の研究をやりやすくする為の世界を国別に分けることを急ぐ地理学者たちは、北西沿岸をばイギリス、スペイン、ロシアおよび Neutral (無国籍)な部分に分けている。こうした分割はもちろん、この各地方に住んでいるさまざまな部族の首長たちに何の相談もなくなされたのだ!もしも欧米人が領土占有のしるしと称している子供じみた各種のセレモニーとか、彼らが発見の海岸で行った天文観測や緯度計測とかがその地に対する領有権を与えるとすれば、新大陸のこの部分は全くもって細切れになってしまい、スペイン、イギリス、ロシア、フランスおよびアメリカ合衆国のあいだで分割されてしまうだろう。ひとつの島を各国がそれぞれ別の岬を発見したと証明できれば、その一島は同時に2、

3 か国の帰属となることもしばしば起るのだ。<sup>(9)</sup>北緯55°(現プリンス・ルパート港辺)と60°の範囲にある海岸が作りなす多くの湾曲部は、ガリ、<sup>(10)</sup>ベーリングとチリコフ、<sup>(11)</sup>カドラ、<sup>(12)</sup>クック、<sup>(13)</sup>ラベルーズ、マラスピナおよびヴァンクーバーによって次々と発見された土地の合計なのである。

いかなるヨーロッパ国民も Mendocino 岬から59°にいたる広大な海岸部に、いまだ永続的な居留地を建設してはいない。この境界を越えるとロシヤの在外商館<sup>ファクトリー</sup>が現われてくるが、それらの大半は分散して互いに遠く、あたかもヨーロッパ諸国が300年前からアフリカ沿岸各地に設けている商館の如きものだ。これらロシヤの植民地の大半は船によってのみ連絡することができ、従ってロシヤ領アメリカ各地の新たなロシヤ語の命名の故に、我々はベーリング海やアラスカ半島の沿岸が、ソノラ州やニュー・ビスカヤ(カリフォルニア半島)がスペイン領であるのと同じ意味で、ロシヤの県や州であるかのように信ずることはできないのである。

南北アメリカの西海岸のうち、チリのマウリン要塞(南緯42°)からサンフランシスコに至るまでの区間が欧州の国民では唯スペイン人のみが居住している唯一の例である。38°より北には独立自主のインディアン諸族の集落がずっと続いている。おそらくこれらの諸族は18世紀の末にアジアの東端から渡ってきたロシヤの入植者によって、しだいに隷属せしめられてゆくだろう。このロシヤ人の南下のほうがもちろんヨーロッパ人の北上よりもずっと速いにちがいない、というのは濃霧と酷寒の風土に住み慣れた狩猟民族のほうが、New-Cornwallの気温をとて快適に思うだろうし、これに反しニュー・カリフォルニアの温暖肥沃な地方からの入植者にとっては同じ土地がとて住めたものではない真の北極地方と思われるだろうから。

ベテルブルグからアラスカの最も東にあるロシヤ商館までの直線距離はマドリードからサンフランシスコ港までの距離とほぼ同じであり、ロシヤ帝国の横幅は北緯60°において世界一の大きさである。そしてロシヤ領東端の<sup>(14)</sup>小要塞はメキシコ領の北端からなお2,000キロ以上も離れていて、この深夜のように暗い地方の土着民は長いことシベリアの狩猟民にもごくこき使われ、その妻子はロシヤの商館に人質として留め置かれたのである。とはいえ、エカテリーナ女帝がJ.Billings隊長に与えた北東アジア探検訓令書(1785年)には人間愛と高潔な心情が息づいているし、<sup>(15)</sup>また現ロシア政府(1801年4月にツァーリとなったアレクサンドル一世のそれ)も、悪習蛮風をへらし圧制を仰えようと真剣に対処している。だが巨大すぎる一国の最も外れの辺境で悪事を止めることは至難の業であり、アメリカ人たちも世界の半分を統治する諸決定を発令する一首都と彼らとの間の余りの遠距離をただ痛感するのみである。

とはいえロシヤ人が自国領とスペイン領をへだてるこの中間地帯を越えて南下しないうちに、どこか別の冒険心に富む強国がニュー・ジョージヤ海岸<sup>(16)</sup>か又は肥沃なその隣島に入

植して基地を開こうと試みることは十二分にあると信ぜられるのである。〔後略〕

3. この最後の一節に表わされた、フンボルトには珍らしい政治的希望は、彼が帰国する少し前、お互いに尊敬しあっているジェファースン大統領のもとに賓客として3週滞在したとき、合衆国が既にナポレオンより大ルイジアナを購入したことを知って、アメリカ合衆国が遠からずあのニュー・カリフォルニアを領有するだろうとの予見に基づいている。果して大統領が1804～06年にかけて派遣したルイス、クラーク探検隊は購入地域を北西にこえて現在のオレゴン州コロンビア河口に達してその肥沃さを報告し、それに刺激されて西部開拓の気運がようやく動きだした。その後1846年 U. S. A. は、18世紀末にヴァンクーバー地区を領有していた英国と協定して大オレゴン州を編入し、さらに1848年にはメキシコ王国を破って現カリフォルニア州を領有するに至ってフンボルトの民主主義的希望は一応形の上では実現したわけである。

参考まで18世紀からナポレオン没落までの〔但しベーリング探検隊（第一次1725～28, 第二次1733～42）を除いて〕欧州諸国が企てた北太平洋（東シベリアを含む）探検の歴史を、ロシア人のそれを主として一覧表<sup>(17)</sup>にしてみよう。

（国の欄でロはロシアを、隊長の欄で（ ）は他国人を示す）

国	西暦	隊長など	事	績	参 考 事 項
ロ	1697	Atlassow	カムチャッカを発見し、ピョートル一世帝は直ちにロシア領と宣言		日本漂流民デンベエを見つけ本国へ連行
ロ	1710	Pernjakow	大河 Kolyma を河口まで下り、湾外北100kmに Bären 諸島を発見		
ロ	1732	Gwosdjow	Fjodorow と共にベーリング海峡を渡りアラスカを発見		リンネの「ラップランド植物誌」が出る
	1742～44	G. W. Steller (ドイツ人、+1746)	ベーリングの隊員としてアラスカより帰ってからも、カムチャッカと付近の島を博物学的民族学的に研究。自費でこの地に学校を開く。「ベーリング海牛」、「ベーリング島誌」なども有名。		弟子クラシェニンニコフによる合作「カムチャッカ誌、1755」が1790前野良沢により和訳される
	1753		日本語学校（1705創立）をイルクーツクに移す。		1781この事が日本に知れ幕府仰天
ロ	1764	Andrejew	Bären 島より東行し、はるか東に一大島（ヴランゲル島）を見たを稱す。これによって測地者ら当地域を詳しく探検。		1762エカテリナ二世の統治（→96）



国	西暦	隊長など	事績	参考事項
スペイン	1774   75	Bodega y Quadra と J. P'erez	アメリカ西岸を北58°まで航行し、多くの島と湾を見つけ命名してスペイン領と宣す。特にファンデフカ海峡からバンクーパー湾に入る。	報告書（英語）が1781に出る
英	1777   79	Cook (第3次)	北極海の西東航路を探す任務をおび、アラスカ西岸をはじめて調査航行し地元の言語も収録した。さらにベーリング海峡に進み入り、北70°30'で氷原に阻まれたが、アリューシャンでロシアの商館と交流し、彼らの地図を見てベーリングいごのロシア地理発見の停滞を知る。	後の北洋探険の雄たる Billings, Vancouver, Dixonらが隊員。この報告がヨーロッパ中に氾濫し各国を刺激。
ロ	1780 から	Schelikhow	アリューシャン、カジャク島に毛皮商人の常設基地をつくる。友好を旨とし地元民を教化する。	1791の手記はすぐに英・独・仏語に訳さる。
ロ	1785   93	J.Billings(英人) と Sarytschew	エカテリナ二世の訓令で Kolyma 河口からベーリング海峡間の北極海岸の調査にのり出したが忽ち氷原に阻まれ断念。89年カムチャッカよりアリューシャンを越え、Steller が調査したカヤク島に至ったが食料欠乏で帰る。91年アリューシャンより北上、聖マタイ島、セントロレンス島を越え64°のアラスカ沿岸へ。帰りは一部の隊員と冬にチュトコ半島を陸路横断して Kolyma 河の基地へ。地元の言語を収録。副隊長はアリューシャンを精査。	英人秘書の報告書が1802ロンドンで出版。ドイツ語のは1803。  1789英商人 Mackenzie カナダ北西部の大河を下り北氷洋に出る。
仏	1787	La Perouse	アメリカ北西岸からハワイ、マカオ、フィリピンをへて日本海に入り、エゾとサハリン間の海峡を欧人として始めて通り我名をつけた。カムチャッカより千島伝いに本州本岸を南下。	隊員 Lesseps は記録をもって1788カムチャッカで下船しパリへ向う。この時、漂流光太夫に会い、その人柄に感服。
スペイン	1791	Malaspina di Mulaggo (イタリア人)	スペイン隊を指揮してカナダ西岸を探り北60°の氷河と北50°の小海峡にその名を残す。	1794 Vancouver により地図にのる。
ロ	1791   92	Laxman	エカテリナ二世、光大夫とラクスマンを掲見、始めて対日通商に関心をそそられ、シベリア総督に命じて漂流民を帰国させる。ロシア船はオホーツクと根室を往復。	林子平は「海国兵談」のなかで女帝を「文武を兼備した世界最大の人物」と記し、本多利明も劣らず賛美している。
英	1791   94	Vancouver	1789スペインが占據したサンフランシスコの北部を元に回復すべき外交使命を果し、さらにカナダ北西海岸を調査し、始めてこの地域の詳しい地図を作る。	彼の「北大平洋探険と世界一週紀行」が1798に出る。  1794ロベスピエール派処刑される。

国	西暦	隊長など	事 績	参 考 事 項
英	1792  1796	T.Broughton	オレゴンのコロンビア河を遡行し英領とする。政府から自由探険を許されたと判断して、「地理学と万国航海に役立つべく」サハリンから北緯30°まで、千島とエゾもふくめて調べようと、陸中海岸より北上、三つの火山に囲まれた湾を噴火湾と命名、上陸して虻田アイヌ人と接觸。東進して色丹島の前より北上して国後島にぶつかったが、エゾの続きと考え、茶々岳の秀麗さを味わう。エトロフ、ウルップの北岸を走りシンシル島から本州へ向う。悪天で観測できぬまま琉球をへてマカオへ。	バンクーバー隊の副隊長。その報告書は1805に刊行。
	1797 夏	々	琉球をへて再び噴火湾に至り、「欧州ではその存在も疑われていた」津軽海峡を始めて通行して緯度を確定した。「異常に高い利尻岳にまちががなくクレーターが一つある。」ラベルズ海峡は嵐なので、そのままサハリン西岸を北上52°まで至るが、水深3.5mとなり、「北へぬける航路なし」として沿海州へ下り朝鮮海岸に沿って悪天候に悩まされつつマカオへ。	ナポレオンのエジプト遠征はじまる。
ロ	1799	支配人レザーノフ	国策会社「ロシヤ領アメリカ会社」がイルクーツクに創立。最も東端の支所はアレクサンドル諸島のシトカ。	フンボルト中南米探険のためスペインを出国
ロ	1803	Krusenstern  (バルト人)	遣日使節レザーノフと日本漂流民をのせてロシヤ初の世界一周に出発。長崎-対馬海峡-ラベルズ海峡-サハリン東岸を精査-千島-ベトロバプロフスク・カムチャッカー-アリュウシャン-シトカ。対馬海峡に自分の名をつける。	1801アレクサンドル一世の統治(→25) 隊員に16歳の Otto von Kotzebueが。その手記が1809-1814にロシヤ語、英語、ドイツ語などで出る。
ロ	1811	Golownin	中南部千島の精査中クナシリで捕虜になる。	「日本虜囚記」各国語に訳される。
ロ	1815   18	Kotzebue (バルト人)	北極海の東より西への航路の可能性を調査すべくベーリング海峡より北上、コツェブー湾を発見。北米西岸、ハワイ、スンダ海峡をへて世界一周。1823-26にも三回目の世界一周を果たす。	博物学者としてドイツ人 Chamisso が同行。  1818英人ゴルドン浦賀に来る。
ロ	1817   19	Golownin	アメリカ北西岸を精査	1821ロシヤが北緯51°までを自国領と主張し、U. S. A. をモンロー宣言へ動かす。

D. キーンの説では、「18世紀的な探険熱は領土の利害をこえた地理学的熱望と好奇心の故の旅であり、新しい植民地を獲得しようという目的ではなかった」といわれる。自費でやったフンボルトは言わずもがな、富裕で力のある英仏の隊などの多くはヒロイズムと発見者たる名誉をより尊んだのも事実であろう。だがデモーニッシュで茫洋たるロシアの領土感覚は又別ではないか。加うるに激発し長びいた大革命・ナポレオン戦争・大陸封鎖の25年が、これまでなんとかバランスの保たれていた諸国間の交易関係に烈しい歪をもたらし、強国間の勢力均衡をひどく混乱せしめたため次々と征服がまかり通ってゆく。農業三大国によるポーランド分割（その第三次は1795年）、工業国イギリスの武力による市場拡大の企て（マカオ領有策動は1802年から。又インドでの武力行使の激化）、ロシアによるフィンランドとトルコ領の奪取 etc.etc.。このロシアが19世紀になると一そう力をこめて度重なる国家的探険隊を海外へ中央アジアへくり出してゆかし、一時止っていたフランスも1820年代に入るとアルジェリアやインドシナへ食指を伸してゆく。

### III 「影を売った男」が世界一周へ

1. “Der Kongress tanzt, geht aber nie.” 会議は踊る、されどいつかな進まず”といわれた復古調にわくウィーンで外交官と女スパイ、將軍と色事師たちがめまぐるしく角逐している間に、「ロビンソン・クルーソーごっこをしている」と皮肉られたナポレオンがまんまとフランスに上陸して皇帝に返り咲いた‘Cinq Jours’の幕合い小劇。そしてグナイゼナウ参謀長の大決断によって最後の局面でナポレオンを敗った1815年6月ワートルローの逆転劇。その半年後ペテルブルグでツァーリが厳かに「神聖同盟」の締結を全国に告げた祭政一致の復活劇。

旧大陸でのこうした大事件と平行して中南米の特にスペイン領の各地方で、宗主国の弱体化に乗じた独立運動が燎原の火のごとく、しかし余りに暴動的激発的に住民たちをまきこんでいった。とりわけメキシコ王国では白人や混血の神父が武装して運動のリーダーとなり、一時はスペイン権力を圧倒して議会を成立せしめ、メキシコの独立宣言と共和制憲法をかちとったが、ナポレオンの没落とともに勢いをもり返した王党派に打破られ指導者らは銃殺されて画餅に帰してしまつた。（Morelos 銃殺3日後にペテルブルグで「神聖同盟」についてのツァーリの宣言がなされた。）だが「解放者」ボリーバが一度據点を保持したグラン・コロンビヤでは、強力なイギリス南米艦隊の支援をうけた独立共和派のしぶとい反撃がしだいに功を奏していったのである。

2. ワートルローでの逆転勝利に連合国がほっと胸をなでおろし、ミラノではスタンダーが失恋と病気に苛まれながらも日に5時間レオナルドと取組んでいた頃に、ベルリン

でも一人の植物学者がその事を腹の底から喜んでいて、その決戦の5日前に、ロシア北極海探検隊に採用された「祖国を持つことを禁じられた男」シャミソーである。

平和到来とともにペテルブルグの指導層には、10年ぶりに一大航海を起してロシアの海軍力の健在を示し、あわせて北極海をどこまで東へ進めうるか、クック隊以上の技倆と業績を見せてほしいという要望が高まり、前首相のロマンツォフ（又はルミアンツォフ）伯が資金を出して命令者となり、前回の世界一周指揮官クルーゼンシュテルン提督が全権を委任されて造船・人選・経路計画などすべてを統括して、1815年春に「ロマンツォフ南洋・ベーリング海峡探検隊」が編成され全欧に向って報道された。実行の責任者たる船長（大砲8門を備え、リアーリに許可された軍艦旗を掲げているから、艦長というべきだろうが）にはク提督子飼いのオットー・フォン・コツエー大尉が早くから決り、180トンの探検船の名は“Rurik”，即ち伝説的なロシア建国の王祖の名をもらった。また殆どの各国隊がそうであったように、リュウリク号にも博物学者と記録画家が乗るのだが、学者が急病で下りたため新聞によって特にドイツに補充者が求められ、シャミソーは偶然、コツエー船長の父で有名な劇作家たるアウグスト・フォン・コツエー（ロシア政府顧問）と知合いの出版業者（シャミソーの親友でもあった）の家でその新聞を目にして直ちに参加を申し込み、出版業者は彼の科学業績と適性能力を父コツエーに送り、ク提督は直ちに採用し次のような手紙もそえてきた：「……功名心や謝金を当てにすると見込みちがいでして、報酬としては、名誉ある探険に加わったという誇らしい気持ちを持って下さい。見受けたところリュウリク号は極めて良くできており、快適な設備です。船は小型だが貴下の船室は10年前のナデジダ号に乗った学者の船室よりはずっと良いでしょう。」採用の手紙は6月12日着いたが、ベルリンの新聞はナポレオン対連合軍の決戦が迫ったことを連日報道していた。もし前者が勝てば、ロシアは自国内に退き、リュウリク号の企図は延期されるだろうか。そして自分の実存は又もやあの影を失った男と同じく、しがたない文筆と定職なき植物研究の二足わらじの相克のうちにすり減ってゆくしかないのか……。だがたとえナポレオンが復位しロシアが西欧から勢力を失うとしても、いやむしろそうならば益々もってロシアは東へ目をむけ、太平洋を重視し、力をそこへ伸ばさなければならぬ宿命にあるのだ。<sup>(21)</sup>だからやはりリュウリク号は出航し、彼はやはりコペンハーゲンで乗船して大西洋を渡り、イースター島民と楽しく物交し、サンフランシスコではコツエー船長がスペイン隊長から抑留されていたロシア人密猟者らを受取る「外交的折衝」を目撃し、北緯66°15′のアラスカ側でコツエー湾を「発見」したが、船長がそこで北上を打切ったことを怪しみ、アリューシャンでは植物採集に島の奥へ入って戻ってこないドクターを探せと命ぜられ、真暗な夜に険しい崖とすべる氷を冒して数人の部下を導き（シャミソーのアルプスでの採集経験が物を言った！）全員を無事に連れ戻ったり、とにかく学者としても探険家としても精一杯の活動ができ、多くの業績をあげることもできたのである。<sup>(22)</sup>（シャミソーの項は次回へ続く）

## 資料について

章ⅠについてはH.Heimpel, Th.Heuss, B.Reifenberg 共編のDie Groben Deutschen II Band, Prisma社1978年のStein, Gneisenauの項;アンリ・トロワイヤ, 工藤庸子訳「アレクサンドル一世」中央公論社1982年の7, 8章; G.Taddey 編のLexikon der Deutschen Geschichte, Kröner社1977年; Le Petit Robert 2, S.E.P.R.E.T.社1974年版; A.von Chamisso, Sämtliche Werke II Band, Winkler社1975。

章ⅡについてはA.v.Humboldt; Kosmische Naturbetrachtung, Kröner社1958; A.Meyer-Abisch; Alexander von Humboldt, rororo 1967年; D. キーン, 芳賀徹訳「日本人の西洋発見」中公文庫1982年; D.Henze 編 Enzyklopädie der Entdecker u. Forscher der Erde, Akademische Druck-u. Verlagsanstalt社 (Graz) 1978年; 加藤九祚「シベリアに憑かれた人々」岩波新書1974年。

章ⅢについてはA.v.Chamisso, Sämtliche Werke II Band, Winkler社; N. ザドルノフ, 西本昭治訳「北から来た黒船」朝日新聞社, 1977年。

## 注

- 〈1〉 トロワイヤ「アレクサンドル一世」184, 186, 214 頁
- 〈2〉 和訳すれば「ドイツ諸国の中央行政管理評議会」
- 〈3〉 Schlemihlとはユダヤ語で‘へまな男’, ‘運のない奴’だと作者は説明している。
- 〈4〉 その一部訳: 「ますます狭く急になってゆく尾根道はしばしば25cmの幅しかない所がある。地元民はすべて高度5,000m辺でついて来なくなった。いくら頼んでも脅しても駄目で、インディアン達は我々よりも呼吸困難がきついのだと言ひ張った。残るは親友ボンブラン, 地元貴族の息子ら3人と私。殆ど霧に囲まれてだめだと思ったのに、我々はすごく歯をくいしばって望んだ以上高く登った。左側は絶壁が雪におおわれ、その表面は凍ってガラス状で、斜度30°の鏡板だ。右を見る目は300mも深い奈落に恐ろしく落ちこみ、そこからは雪のない岩塊がそそり立っている。我々は左へ落ちた方が助からないと見えたので、体をますます右側へ傾けていった。
- 〈5〉 彼とナポレオンの関係が冷たいままで終わったのと全く対照的に、南アメリカの解放者シモン・ボリーバル (1783~1830) との友情は殆ど師弟関係にまで深まっていった。
- 〈6〉 Albionはイングランドの古い呼名。
- 〈7〉 1792年のマラスピナ探険隊副隊長ドン・ディオニシオ・ガリアーノの日記。
- 〈8〉 D. キーン「日本人の西洋発見」14頁。「日本の武家政府は結局、誇り高く御しにくいポルトガルの武人よりは、おとなしいオランダ商人の方を交渉相手に選んだのである。」
- 〈9〉 現にバンクーバー島の50°にあるNootka港をスペインが1789年に自国領と主張して英国船を拿捕し、英国艦隊がかけつけて交渉し、3年後にG. バンクーバーが赴いて回復したことは有名だ。
- 〈10〉 スペインの航海者, 1585年マニラで死亡。
- 〈11〉 ビョートル一世の命によるベーリング隊の2回12年にわたる探険については、加藤九祚「シベリアに憑かれた人々」に詳細かつ入魂の記述がある。
- 〈12〉 スペイン探険隊長。1794年にバンクーバー島でバンクーバーと会っている。

- (13) イタリア人でスペイン探険隊長 (1791~92)。北緯60°の海岸で大氷河を発見し、彼の名がつけられた。
- (14) たぶんアレクサンドル諸島の外洋に面したシトカ港。
- (15) D. キーン上掲書70, 171頁に、同時代の日本の洋学者たちのエカテリーナ二世に対する過大な賛辞がよく引用されているが、これは幕府当局の狭量と事勿れ主義を叩くためであろう。
- (16) たぶん現バンクーバー港のことだろう。
- (17) 但し露日関係についてもD. キーンの上掲書と、木村汎編「北方領土を考える」北海道新聞社1982年、の第一部、外川継男「北方領土の歴史」という名著に委ねることとする。
- (18) 18世紀の前半からすでに、いかに多くのドイツ人博物学者がロシア科学アカデミーに属してシベリア奥地を調査したとか。(加藤九祚「シベリアに憑かれた人々」)
- (19) 1812年夏ツァーリはペテルブルグに來たナポレオンの副官に向って、「もしロシアが正当な目標を追っているにもかかわらずナポレオンが戦争を始め、彼が武運にめぐまれるならば、そのときはベーリング海で媾和の調印がなされるでしょう」と言い放っている。(トロワイヤ上掲書183頁) なんとこの考えは、核戦争の恐怖を物ともしないかに見える現代のソビエトロシアの姿勢につながるところがないだろうか。
- (20) A. トロワイヤ上掲書, 273, 279頁。
- (21) 1829年ロシア大蔵省はA. フォン・フンボルトに委託して、南部ウラルからアルタイ山脈に向ってアルマアタ辺までを、主として鉱床探索を目的として半年間調査をせしめ、相当の経済的成果をあげたという。A.Meyer-Abisch:A.v.H.rororo 122-124頁。
- (22) リューリク号の狭い士官室には、夜二人の士官、ドクター、学者が眠るが、起きている間はそれに画家と飛入りの変人生物学者が加わって6人居住となる。たった一つの机は船長も入って7人の食卓となるし、使用順位はどうぜん士官とドクターが優先し、画家は製図板で二面を必要とすると主張するしで、学者は航海中や寄港地で蒐集した標本を蔵う場所もろくないという不本意な立場になっていた。否それ以上に仰天したのは船がPlymouth港に着いたとき船長がシャミソーに厳しく申し渡した注意である：「貴君は乗客をのせる習慣のない軍艦に、乗客として乗っているのだから、要求がましい事は一切できない。ここがヨーロッパ最後の寄港地で、国へ帰りたいのなら今のうちが一番楽です。」学者はもちろん最後まで同行を誓ったけれども、その語気と意味には深くショックを受け、船長に対するしこりが生涯彼の胸から消えなかったと述懐している。

〔完〕

〔旭川医科大学・ドイツ語〕